

幼児期における線描教育に関する一考察

桶田 洋明*・松下 茉莉香**

(2022年3月22日 受理)

A Study on Line Drawing Education in Early Childhood Education

OKEDA Hiroaki, MATSUSHITA Marika

要約

絵画において線描は根源的・基礎的表現方法であり、そのうえ現代の美術分野においても線描のみで表現された絵画はプリミティブな魅力と斬新な表現様式としての特徴があるため、十分な魅力や造形要素を含んでいる。またプリミティブな魅力を持つ線描表現は、子どもの描く絵に通じており、特に幼児の線描は鑑賞者の心を和ます力を持ち合わせている。そこで本研究では、幼児期における線描表現に効果的な描画材とそれらに関連する表現技法、およびその指導法について考察した。

線描の役割はタブローの下描きとして、線描そのもので表現するものとしての2種があり、特に後者は長めで迷いのない線での描写に魅力が出ることを確認した。描画材は画用紙に適したものが大半を占めるが、マジックやペン、水彩絵具等は表面が平滑な用紙でもきれいな線描表現が見られた。スクラッチやスチレン版画での線描表現による授業実践を通して、作業工程が特殊で明確なこれらの表現を幼児が実践することの有用性を導き出した。

キーワード：線描、技法、絵画、スチレン版画、幼児

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

** 鹿児島女子短期大学 児童教育学科 准教授

I. はじめに

絵画において線で描くこと＝「線描」は根源的・基礎的表現である。絵画の起源である洞窟壁画のほとんどは線で描かれており、その後の色材を用いた絵画表現でも描き始めは線で形体を描き表す工程が一般的であり、現代でもその過程は引き継がれている。描画材に関しても鉛筆やペン、チョークなどをはじめとする平易なタイプを使用するだけで、具象・抽象を問わず形体を短時間で線描による表現をすることができる。加えて現代の絵画においては描き始め・下絵としての輪郭線描画のみならず、線描のみで表現されたタブローも散見できる。多様化する現代の美術分野において、色面を主とした従来型の絵画様式とは異なり、線描のみで表現された絵画はプリミティブな魅力と斬新な表現様式としての特徴があるため、色面を主とした一般的なタイプとは異なる魅力や造形要素があるのであろう。

プリミティブな魅力を持つ線描表現は、子どもの描く絵に通じている。特に幼児が描く絵画表現は線描が中心であり、その素朴で自然な線の流れは鑑賞者の心を和ます力を持ち合わせている。その線は描画材の種類や表現方法、保育者の指導方法の違いによって変化する。線描は手や腕を使って事象を自由に表現するためのトレーニング的要素もあるが、当然ながら形や色彩などをはじめとした絵画の造形要素を学ぶための表現のひとつでもある。そこで本研究では、幼児期における線描表現に効果的な描画材とそれらに関連する表現技法、およびその指導法について考察していく。様々な描画材による線描表現の特徴や幼児教育との関連について検証したのち指導法を導き出し、学生を対象とした授業実践を通して幼児に対する線描教育法を構築していく。

II. 線描の役割と子どもの線描表現

1. 線描の役割と特質

前章でも少し述べたが、線描の役割としては2つに大別できる。1つは作品・タブロー制作の初期段階に用いる、下描きの要素が大きい線描である。主として具象物を表現する際に用いることが多いが、事物の輪郭線を描き、それから色面による着色を施していく工程がこれに該当する。輪郭線の後に色面着色をするこの工程は多くの着色された絵画制作においてもっとも一般的なものであると言える。この下描きの要素が大きい線描において、西洋と東洋の作品で比較すると表現方法が異なる。古典的な西洋絵画を中心とした油彩表現においては、輪郭線を木炭・鉛筆または直接油絵具で描き、その後着色していき、最終的には当初描いた輪郭線は絵具によって見えなくなる描画方法が多い。一方で、東洋の絵画に用いられる墨による表現や日本のいわゆる「日本画」においては、輪郭線が最後まで残っており、作品によっては陰影を表現せず輪郭線のみで完成としたものも存在する。これらの作品の場合、線の良さが作品自体の魅力に直結するため、線描の勢いや強弱、色調

など線の表現技法を習得していないと良い作品を生み出すことができない。

もう1つの役割としては、線描そのもので作品の大半を表現するタイプである。具象的形体を表現する際にも色面での描画を使わずに輪郭線だけで表現したり、色面を使っても最小限の使用にとどめ、輪郭線を主体とした様式を用いたりする。また輪郭線以外にも線による流れ・動き・速さを表現したタイプも該当する。これらの表現は具象的な形体だけではなく、観念的で感覚的な表出として用いられることがあり、おのずと完成作品は抽象的要素の強いものとなっている。色面に頼らずほとんど線だけで表現する絵画は素朴でシンプル、かつコンセプトが明確に伝達できる等の利点がある一方で、単純な表現であるが故に画一的な画面になることがある。それらを防ぐために、線の抑揚、太さや動き、色の工夫など、様々な描画技法の試用をしてタブローとしての要素を付加した作品も存在する。線だけでの表現そのものは極めて単純・明快であるが、各々の作品は微妙に異なった描画技法を選択して表現されており、実際には描画技法や色彩、表現形体等の関係が複雑な連携で成り立っていることが理解できる。

ここで参考作品を基に検証してみる。図1はアルベルト・ジャコメッティ (Alberto Giacometti : 1901年～1966年) の作品である。ジャコメッティは20世紀を代表する彫刻家の一人で、細長い彫刻作品を生み出したことで有名であるが、絵画作品も多数存在し、その評価も彫刻同様に高いものがある。彼の絵画作品を見ると、そのほとんどが多数の描線を用いて描かれているという特徴を持っていることが確認できる。図1の作品では、女性の姿を複数の黒い線で描いた後、灰色系の絵具で彩色している。その後、白色等で描き加えているが、ここでも線描を多用した描画をしている。ジャコメッティの鉛筆、ペンなどによるドローイング作品は多数の描線によって描かれているが、本作のような油絵具によるタブロー的作品



図1. アルベルト・ジャコメッティ
《アトリエに座るアネット》1960年

であっても複数の線描で作られているところが興味深い。そしてその線はドローイング、タブローともに勢いがあり、長めのストロークで力強く描かれている。そのような描画方法から彼の絵画作品は人物のポーズが動勢のない単なる立像、座像であっても、激しい線の流れや交差によって画面が常に流動しており、鑑賞者は躍動感を感じ取ることができる。

もう一点、図2はジャクソン・ポロック (Jackson Pollock : 1912年～1956年) の絵画である。ポロックは抽象表現主義の代表的な画家であり、また彼の技法はアクション・ペインティングとも呼ばれた。ポロックは、床に敷いたキャンバスの中央に立ち、穴の空いた缶に入れた絵具を滴らせて描いたり (ドリッピング)、棒などを使って絵具を垂らしたり (スプラッシュ) して作品を制作した。その結果、画面は一部を除き無数の曲線による集積・重なりで成り立っており、鑑賞者はその全体



図2. ジャクソン・ポロック 《秋のリズム Number 30》 1950年

の密度ある画面に圧倒され、引き込まれていく。筆などを使って直接描いた線ではないが、長いストロークで勢いよく画面を疾走する線の集積によって、画面に躍動感や重厚感が表出されている。さらに作品によってはその線の色を変えて重ねることで様々な色彩が画面に点在し、より複雑な画面構成を生み出していることが読み取れる。前述のジャコモッティ作品とは技法面での違いはあるものの、長いストロークでの勢いや動きのある筆致という点においては共通していると言えよう。さらには、複数の線による集積で制作者の行為を読み取ることができる点も一致している。

以上、線描の2つの役割として、作品・タブロー制作の初期段階に用いる下描きの要素が大きいもの、線描そのもので作品の大半を表現するものを挙げ、それぞれに関して分析した。特に2つ目の役割においては、線そのものの魅力によってその作品の良さを表現することができるということが参考作品等からも確認することができた。その魅力とは、比較的長いストロークによる迷いのない線で描かれたものであり、またそれらを集積すること、つまり線による重層を行うことで制作者の行為や時間的経過を表現することができる。次節ではそれらの線を表現するための材料やそれらに伴う描画技法について検証を行うこととする。

2. 描画材の分類

本節では様々な描画材による線の表現の特徴について検証する。とはいえ、全ての描画材について検証することは不可能なため、ここでは主に子ども、特に幼児期に使用可能で使用頻度が高い描画材を選択して見ていくこととする。ただし、一般的に子どもがあまり使用しない描画材も一部含めて調査を行う。線描の表現には描画材のみならず、支持体との関連も小さくはない。しかしこの支持体も多数存在するため、今回は2種の用紙のみで検証することとする。その用紙の1つは一般的な画用紙である。表面のマチエールは適度な凹凸が見られ、その凹凸にひっかけて描画をすることができる。もう1つの用紙は光沢紙とする。これは表面のマチエールがきわめて平滑なタイプの用紙として選択したが、ケント紙などでも類似した性質を持っていると思われる。以上2種の用紙に選択した描画材で描画し、それぞれの描画材における定着のしやすさ、表現された筆致の種類等を確認していくこととする。

選択した描画材は以下のものである。

- ①鉛筆（4Bの太芯、8Bの通常芯）（図3、図4）
- ②ハードパステル、クレヨン（図5、図6）
- ③水性ペン、マジック（細字）（図7、図8）
- ④チョーク、木炭（図9、図10）
- ⑤不透明水彩絵具、透明水彩絵具（図11、図12）

それぞれについて簡単に結果を解説していく。

①鉛筆は4Bの太芯、8Bの通常芯の2種を扱った。鉛筆の芯は硬軟の幅が広いが、一般的には低年齢児ほど柔らかいものを扱うため、今回はこの2種とした。また芯の幅で違いが出るかも含めて調査した。結果は画用紙のほうがはっきりとした線描表現が見られた。また太芯、通常芯の差はさほどなかったが、太芯は曲線の太さに不均一さが出ていた。光沢紙のほうもある程度の描画はできたが、画用紙のような凸部がない状態のため、濃い線は得られていない。「鉛筆は紙の表面にある微細な凹凸で芯が摩擦されて色がつく⁽¹⁾」ため、凹凸の少ない光沢紙では低摩擦の状態では描画されていることから、十分な描線が得られないのであろう。

②ハードパステル、クレヨンは予想通り画用紙には明快に描画できている。また画用紙の凸部に特に多くの色が付着し凹部にはあまり付着しないことから、まだらの線描が表現されており線そのものにニュアンスが感じられるものになっている。光沢紙は、ハードパステルにおいてはほとんど線の表現ができていない。これはハードパステルの表面が固く、用紙の凹凸部にひっかけて描く描画材であるがゆえに、凹凸のない光沢紙では描画が不可能であることを表している。一方クレヨンのほうは光沢紙でも描画できている。これはかなり意外な結果ともいえるが、体質顔料、固形ワックス液体油等で練られたクレヨンが適度な粘性を持つことで、平滑な支持体にも描画が可能になっているということであろう⁽²⁾。なお画材メーカーによってこれらの配合は異なるため、全てのクレヨンがこのような線描表現になるということではないと思われる。

③水性ペン、マジック（細字）の場合、画用紙では用紙の凸部を中心に付着し、わずかなまだら線になる。また早い筆致で描くとこのような線はより顕著に表れる。結果的にやや擦れた状態の線描となる。光沢紙のほうは均一な色で付着されており、さらに平滑な用紙の上を滑らすようにペンを動かすだけで滑らかな線描を得ることができる。ゆえにこれらの描画材は凹凸のない用紙への描画に適していると言えよう。

④チョーク、木炭は画用紙においては心地よい線描表現ができている。用紙の凸部にひっかけて描く描き方は他の画材と同様だが、最も弱い筆圧で描くことができる。チョークは極めて柔らかく、また最小限の固着剤で作られており、木炭に至っては固着剤そのものをほぼ含まないため、わずかな圧で削り取ることができる。一方、光沢紙ではそれぞれを削り取るための凸部がないため、線はほぼ表現できていない。なお木炭の原料として代表的なものは柳である。ほかには葡萄、プラタナ



図3. 画用紙
鉛筆:4Bの太芯、8Bの通常芯

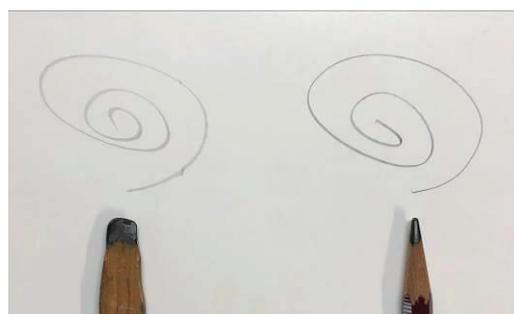


図4. 光沢紙
鉛筆:4Bの太芯、8Bの通常芯



図5. 画用紙
ハードパステル、クレヨン

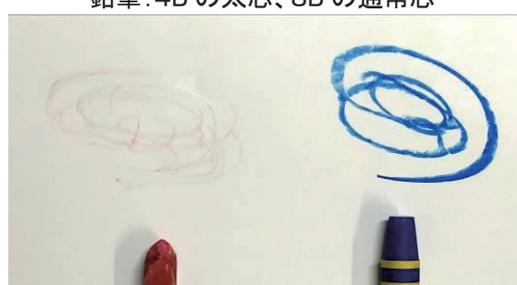


図6. 光沢紙
ハードパステル、クレヨン

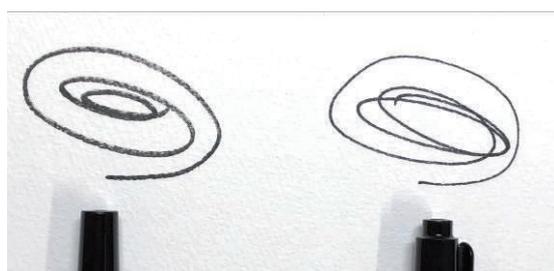


図7. 画用紙
水性ペン、マジック(細字)

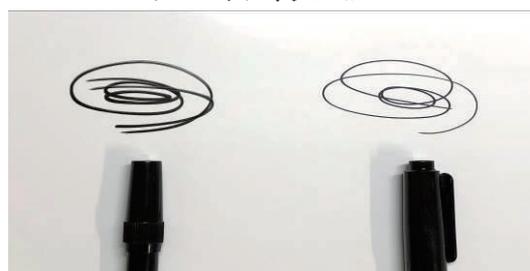


図8. 光沢紙
水性ペン、マジック(細字)



図9. 画用紙
チョーク、木炭



図10. 光沢紙
チョーク、木炭



図11. 画用紙
不透明水彩絵具、透明水彩絵具



図12. 光沢紙
不透明水彩絵具、透明水彩絵具

ス、桑など様々な原料が用いられるが、いずれも柳よりも固く、やや高度な描写力を必要とする⁽³⁾。固い木炭を扱うためには高い筆圧が必要になるため、子どもが使うことを考慮すると自ずと柳を選択することになる。

⑤不透明水彩絵具と透明水彩絵具であるが、ともに顔料と展色剤のアラビアゴムと、湿潤剤のグリセリンを練り合わせた水性絵具であるため、双方に大きな差はない。しかしながら顔料の含有率は不透明水彩絵具のほうが高く、また展色剤のアラビアゴムが高濃度のものは透明水彩絵具、低濃度のものは不透明水彩絵具となっている⁽⁴⁾。また不透明水彩絵具は透明水彩絵具よりも厚塗りが可能であるため、水彩絵具でありながら下層の絵具層を遮断した盛り上げの技法も用いることができる。なお、子どもが使用する水彩絵具は不透明水彩の性質を持つものが一般的である。また、透明水彩・不透明水彩双方の性質を持ち合わせた学童用の水彩絵具もあり、これによって幼児期から児童期の小学校低・中学年では不透明水彩的表現を、高学年の小学生から中学生にかけては透明水彩的表現を用いることもできる。さて、この2つの水彩絵具での比較は、画用紙では透明水彩絵具のほうが水で薄めた際の透明度が若干高い程度の結果であったが、光沢紙では透明度に明確な差が出た。光沢紙において、不透明水彩絵具は水に薄めてもあまり変化のない不透明度で描画されている一方、透明水彩絵具では透明度の高い箇所と絵具が多い箇所との差が大きい状態で表現された。この透明水彩絵具での不均一な透明度の線は、広域における同一の不透明度での描画が不向きである反面、そのムラのある透明度によって色調の変化が表現されることとなり、絵画的表現をする際には効果的であると言える。

以上、本節では複数の描画材による線の表現の特徴について、2種の用紙にて検証した。その名の通り、画用紙での描画はほぼすべての描画材が適切な線描表現を可能とした。光沢紙での描画については、表面の凹凸がないフラットなマチエールゆえに、凸部に当ててその素材を剥ぎ取るタイプの描画材では満足のいく線描表現は表われなかった。しかし液体を含むタイプの描画材、水性ペン、マジック、水彩絵具では伸びのある筆致で強い抵抗感なく描くことができた。水性ペン、マジックは画用紙よりも光沢紙のほうが自在な線描を生み出すことができた。またクレヨンも光沢紙においても滑らかできれいな発色を保ったままの線描が可能であった。粘性の高いクレヨンは想像以上に様々な支持体への描画ができることが明確となった。これらの結果を踏まえ、次節では幼児や児童に適した線描表現のための描画材や表現技法についてまとめていく。

3. 幼児・児童にみられる線描表現

前節における検証で、支持体を凹凸のある画用紙とフラットな表面を持つ光沢紙との比較を行った。描画材は5グループの計9種（鉛筆は1種、水彩は2種と換算）で2つの支持体に描画した。その詳細は前述の通りであるが、その中でも子どもに適した描画材と支持体の組み合わせが明確になってきたと思われる。そこで本節ではそれらを総合的に省察し、子どもの中でも特に幼児期の線描表現に適した素材（描画材、支持体）と描画技法についてまとめてみる。

支持体別に分類して検証していく。凹凸のある画用紙は、ほぼすべての描画材が適切な線描表現を可能としたが、水彩をはじめとして鉛筆、ハードパステル、クレヨン、チョーク、木炭は特に明快な線描表現を見ることができた。図 13 の 1 のように、画用紙の凸部で削られた色材がそのまま固着し、凹部には色材が届かないことで結果的に点描に類似した表現を見ることができると言える。鉛筆においては柔らかい芯のものをすることでこれらの表現が顕著となる。パステルは顔料に展色剤として少量の水性糊材で固めたものである。ハードパステルは糊材が多め、ソフトパステルは少ない糊材で出来ている。クレヨンは油性の展色剤で作られているため画面への固着力は強いが、パステルはクレヨンよりもそれは劣る。よって一般的には固着を高めるためにパステルで描画後は、定着スプレーをかけることが多い。固着力の低さはチョークや木炭も同様である。固着力が低いという事は描画した線などを消すことも簡単にできるため、その性質を利用した描画も可能となり、表現の幅を広げることができる。しかしながら描画した作品を保存する際はその固着力の弱さがネックとなる。定着スプレーをかければある程度固着はするが、それでも不完全な状態である。また定着スプレーをかけることで色の明度・彩度は下がり、さらに用紙に付着した色が画面に定着することでフラットな絵肌となり、描画直後の印象とは異なる状態になってしまうことも欠点となる。これらの点を考慮すると、特に幼児期にはやはりクレヨンが最適な描画材であると言える。なお、水彩絵具は絵具に混ぜる水の量が少ないと用紙の凸部のみに付着し、多いと用紙の凹部にまで入ることで紙のすべてを覆う表現が可能であり、絵具に加える水の加減によってこれら 2 種の表現を生み出すことができる。

次に、今回は光沢紙を用いたが平滑なマチエールを持つ支持体の場合、図 13 の 2 にあるように用紙に塗ることができる描画材が適している。今回扱った描画材の中では水性ペン、マジック、水彩絵具が該当するが、高粘性を持つクレヨンも描画可能であるため含むことができる。これらの描画材は画面の凸部に擦ることで色材を定着させるのではなく、液体状またはそれに近い粘性を持つ色材を画面に付着させ、用紙がその色材を吸収することで固着する過程で成り立っている。幼児期に使用する描画材としては水性ペン、マジックの類は問題なく使用できる。マジックのような油性ペンは衣服等に付着した際、取り除きにくいという懸念が

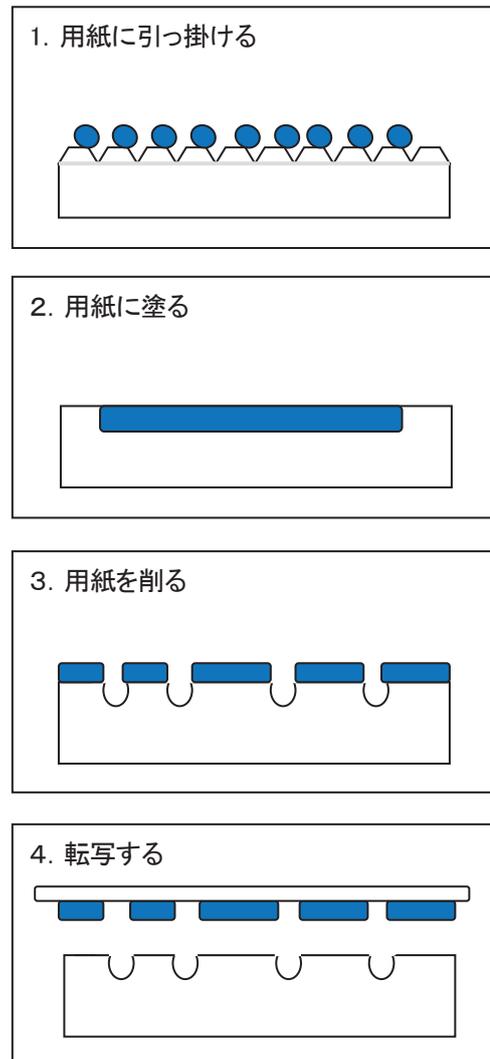


図 13. 用紙への描画材による線描表現例
(断面図)

あるが、水性ペンよりも軽い筆圧で滑らかな描線が可能である。なお水彩絵具について、幼児期では他の描画材で線描後に補助的に描画するような用途が多いため、線描表現にこだわらず自由に描画することが好ましい。児童期になると水彩画での様々な表現をするうえでの線描による表現も可能となってくる。

ここまでは支持体である用紙の上に描画材で線描を表現するタイプの技法における検証であったが、他の描画技法も存在する。そのうち、幼児期でも実施可能な描画技法として2つ取り上げてみる。1つは支持体である用紙を削る技法である(図13-3)。スクラッチと呼ぶこともある本技法は用紙に直接釘やニードル等で線を引き、用紙に凹部の溝をつける方法となる。用紙に絵具やクレヨンで描画した後、スクラッチの技法を使うことで、絵具やクレヨンの部分を削り取り用紙の白色による線が表出される。この技法での線描はきわめて細く、しかも用紙の色での線が表現できるため、絵具やペン等で描いた線とは異なり独特の表現を得ることができる。また、先に用紙そのものにスクラッチで溝を付けておき、その後絵具を塗ることで溝の中に絵具が多く入り、絵具による線を生み出す技法もある(図14)。さらには用紙にクレヨン等で塗った上に絵具で覆い、その後ニードル等で絵具のみを削り取ることで下層のクレヨンを線で表出させて表現する技法も挙げられる。



図14. スクラッチ+水彩による表現

もう1つは版画的技法を用いて転写による工程によって表現する方法である(図13-4)。線描で版画とえばエッチングなどの凹版を筆頭に凸版の木版、平版のリトグラフなど多数該当するが、幼児期の表現に限定し安全な用具を使った技法を挙げると、スチレンボードにマジックで線描して版を作る、スチレン版画などが該当する。本技法によって得られた版の凹部の線には色材が付着しないため、転写した際は用紙の白色としての線描が表現される。マジックで描写した線がそのまま表現され、しかもマジックの色とは異なる、例えばマジックが黒の時は白色の線になるような明度が反転した状態で写し出すことができるため、通常用の紙の上にマジックで描画したものとは真逆の明度で表現された線描を生み出すことができる。

図13の3と4に該当する技法に関しては、次章にて授業実践を基に検証していく。

Ⅲ. 線描を取り入れた授業実践

本章では、幼稚園教諭や保育士を目指す学生に対して行った2つの授業を基に、幼児期の線描について考察していく。

1. スクラッチによる線描表現

スクラッチによる線描は、画材の種類と色をあらかじめ選んで描く通常の描画と異なり、線描に用いる道具の違いによって線の太さが多様に変化し、削る場所によって現れる色の違いや、ひっかいて削るというマイナスの行為から線や造形が得られるといったことから、幼児にとって様々な造形や新鮮な気づきを得られる活動である。

また、技法遊びならではの偶発性や不思議さといった要素が線描に加わることで、幼児にとって予測できない表現になる可能性が含まれているからこそ、幼児の好奇心を刺激する題材とも言える。

では、このような表現を幼児と行う際、どのような点に配慮して展開していくべきかということについて、授業実践を基に考察していくこととする。

まず1つ目の授業実践では、マーブリングやフロッタージュといった複数の技法遊びの学習の一環として、スクラッチによる線描を学生に体験させた。テーマとしては、技法を試す中で得られた様々な造形や模様から、表したいものの発想を広げ、最終的にコラージュしたり絵を描き加えたりして加工し、ひとつの作品に仕上げるよう伝えた。なお、表現するものは抽象、具象を問わず自由とした。

スクラッチの工程としては図15の通りである。まず、工程①のクレヨンによる色面の下地作りでは、削った時に色が明確に現れるようにクレヨンに十分筆圧をかけ、画用紙の白い隙間がなくなるまで濃く塗りつぶすよう伝えた。

次に、工程②で2層目を重ねる際には、茶や紫など暗めの色を黒の代わりとして使用しても良いこと、工程③では、割り箸、竹串、フォーク、直定規など多様な道具を配り、クレヨンの層を削りながら鮮やかな色の線に着目しながら制作するよう伝えた。これについて、学生間で作品を見せ合うことで、選んだ道具による線の太さや現れる線の種類の違いなどを確かめる様子が見られた。また、納得いかない線は2層目のクレヨンを再度重ねて繰り返し線描を楽しめるということや、輪郭の内側を箸などで削り出したり、定規やカード等の平らな面をコンパスの様に動かして上層のクレヨンを削り取ったりすることで、カラフルな色面を表せることなども体験の中で発見していた。

最後に、このような活動を幼児と行うには、どのような点を配慮すれば良いか幾つか挙げていく。

まずはクレヨンで色面を作る際には、一層目をしっかり塗ることで技法と線の良さが活きるため、できるだけ濃く塗る事を指導することが大切である。しかし、筆圧が弱い幼児については、クレヨンの上をキッチンペーパーなどでこすり、紙の目にしっかりとのせるように促すと線の色がある程度

対 象：短期大学1年生
時 間：90分×2コマ
テーマ：スクラッチ等の技法遊びから生まれた造形を基に表現したいテーマを発想し、作品を1点制作する。
サイズ：A4版(210mm×297mm)
材 料：画用紙、クレヨン等
道 具：割り箸、竹串、フォーク、直定規、粘土ヘラ、油性ペン、釘 他
工 程：①画用紙に黒以外のクレヨンで色面を作る。 ②①の上に黒や茶など暗めのクレヨンで全面を塗りつぶす。 ③様々な道具でひっかいて線描する。 ④複数の技法と組み合わせ作品を仕上げる。

図15. 授業実践①スクラッチの概要

明快になる。

また、紙のサイズについて、幼児にとってはクレヨンで色を塗ることに労力を要する為、適度な紙の大きさになるようにし、大きめの紙で制作する場合には2層目を水溶性の絵の具を刷毛で塗る方法を取り入れ、線描する前の工程を幼児にとって負担が少なくなるようにすることも必要である。加えて、上からのせる絵の具も黒に限定せず、白や有彩色を使っても色への関心を持たせながら線描を楽しめるため、どの絵の具を使うか検討することも大切である。

2点目に、線描に使う道具は、幼児が安全に使えて掴みやすい適度な厚みがあるものが適当でありこれに加えて、力をかけても強度があることも重要である。そのため、割り箸やフォークなどが幼児にとっては最も扱いやすい道具と言える。また、割り箸そのものや、箸を半分に割ったもの、先を削り器で尖らせたもの、複数本束ねたものなど、同じ道具でもひと工夫加えると、使い方によっては多様な線が描け、幼児にとっては表現できる線の幅も表現も広がるだろう（図16～19）。

3点目は、このような活動が単なる技法の伝達や指導に終始しないよう、技法を使った線描を体験する中で、子どもが線の色や表情の変化、描く楽しさ、材料の面白さなどに気づけるように保育者が関わる事、さらに大前提としてこのような技法を活かして何を表現したいかといった描くものやテーマ設定の検討も大切である。



図 16. 竹串による線描

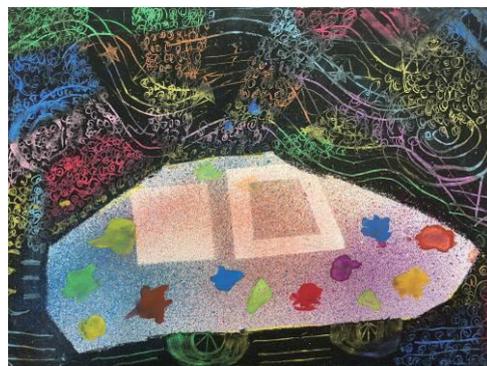


図 17. 割り箸やフォークを用いた線描



図 18. 竹串・割り箸による線描



図 19. 竹串を用いた線描

2. スチレン版画による線描表現

前章の3節で述べた通り、スチレン版は板状の発砲スチロールに、ペンなどの画材や粘土のヘラ、割り箸などの道具で線描することで、版材の表面に溝を作って刷る版の一種である。

スチレン版と同じ凸版である木版画は、図柄を細工する際に彫刻刀を用いるが、スチレン版は特別な技術を必要としない、身近な道具で製版できるため、児童や幼児でも安全かつ手軽に製作することができる。

また、版材のスチレンボードは、柔らかい素材で簡単に跡がつく版材であるため、前述した線描用の画材や道具の他にも、調理用の型抜きやペットボトルのキャップなどの様々な道具で型押しすることで意図して描いた線とはまた一味違う線や造形を得ることができる。これらを踏まえた上で、2つ目の授業実践として線描を伴う回転スチレン版制作を行い、幼児と活動する際の留意事項を考察していくこととする(図20)。

まず、授業導入時に筆者が実演しながら3原色のインクを使い、版を一方方向に回転させながら、重ね刷りする様子を示し、回転スチレン版の手順や特徴を伝えた上で、どのような向きになっても映えるような抽象的・半具象的な表現をテーマに制作させた。

次に、版画で表現したいテーマが決まった者から線描用のペンや、割り箸などの道具でおおまかな下絵を作らせていった。線描する際には仕上がりのイメージを持たせるために、ペンや割り箸で線描して刷った作品と、抜き型やキャップなど型押しして造形にした作品とを参考作品として提示した。

また、下絵の制作途中に、調理用の抜き型なども配布し、型押しして線や形を表現できること、抜き型の並べ方や、異なる形・大きさの型の組み合わせ方によって様々な造形が得られることなどを伝え、図柄作りが深まるよう指導した。

さらに、線描用の道具は線で描く事だけに拘らず、型押ししたり描いた線の内側を点描したり、塗り潰すように使ったりすることで凹部ができ、刷った際に色面を表現できること、定規なども型押しに使うことで線描した時とは異なる多様な効果が得られることなどを示し、道具の使い方を試すよう指導した(図21)。

製版できたら、そのボードの側面にインクと同じ3色で重ね刷り用の印をつけ、見当紙の準備を

対 象：短期大学1年生
時 間：90分
テーマ：回転スチレン版による抽象的・半具象的な表現作品を1点制作する。
サイズ：200mm×200mm
版 材：スチレンボード
道 具：油性マジックペン・油性ボールペン・割り箸・竹串・直定規・フォーク・ペットボトルのキャップ・調理用の抜き型
インク：水溶性版画用インク（赤・黄・青）
印刷方法：馬棟を用いた手刷り
工 程：①線描用の道具を使って、スチレンボードに絵や模様を描く。 ②①の表面にローラーでインクを広げる。 ③見当紙、スチレン版、版画用紙の順に重ね馬棟で刷る。 ④スチレンボードを水洗いし、2色目のインクをローラーで塗布する。 ⑤スチレン版を90度回転させ、③と同様に刷る。 ⑥3色目のインクを④、⑤と同様に重ね刷りする。

図20. 授業実践②スチレン版の概要

させた後、好みの色順でインクをのせて刷っていった。この刷りの工程では、1層2層とインクの色や線描した図柄が重なり合うことで、予想していたものとは異なる不思議な造形が現れることに学生たちも感動の声を挙げていた。また、下絵の線を密にするほど、刷り上がりは明るい色調の線や色面が残り、シンプルな線描で下絵を作っていたものは刷った際に絵全体にインクの色がしっかりとのった作品となることなどが確かめられたようである（図22、23、24、25）。

では、幼児がこのような線描表現を行うには、保育者はどのような準備や配慮が必要であるかを考察していく。

まず、線描の道具については、割り箸や粘土ヘラ等の道具より、描いた線や形を認識しながら製作できるペン類の方が幼児との活動には向くだろう。製作中も下絵の線を確かめながら進められ、作品のおおまかなイメージを持ち活動に臨めるため、幼児にとっては扱いやすい道具であると言える。また、描く道具として使用した油性ペンに含まれる微量の成分には、スチレンボードを溶かす効果⁽⁵⁾もあり、幼児の筆圧の弱さもカバーできる。

授業実践で使用した調理用の抜き型やキャップなどの廃材も、様々な線や形にふれられるため効果的な道具であると考えられる。しかし年少児などは力が弱い為、型押しした際に溝が浅くなり、思うような線や造形が得られない可能性もある。また、型押ししてできた造形はインクを付けて刷ってみなければどのような形になっているか見えにくい分、描いた線のイメージを持たせにくい分、年少児などの活動にはやや取り入れにくい道具と言える。しかし、年長児などへは、抜き型の形やボードの手触りなどを確かめることで大体の形は想像することができるため、幼児でも扱いやすい道具を揃え、使い方を丁寧に指導していけば活動に取り入れる事は十分可能であろう。

また今回は、短大生に向けた実践であったため、刷りの工夫として3色のインクを使った重ね刷りを行ったが、幼児が描いた線を素朴な表現として楽しむには単色刷りで十分だと考える。このような単色刷りの体験を重ねた上で、表現の発展として重色や重ね刷りなどを段階的に取り入れることは可能であろう。



図 21. 線描用の道具を用いて下絵を作成する

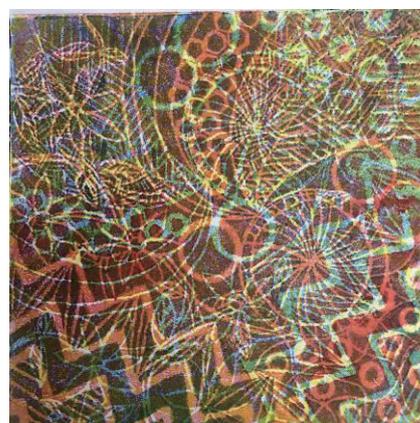


図 22. 竹串による細かな線描

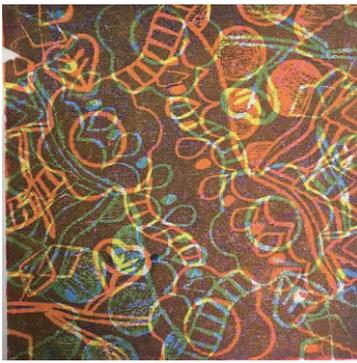


図 23. 油性ペンによる線描

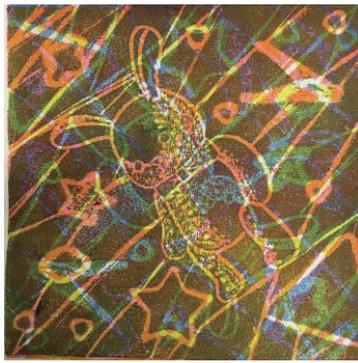


図 24. ペン・割り箸等による線描

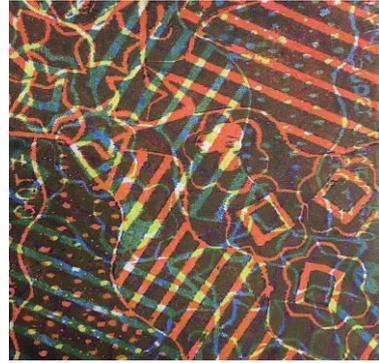


図 25. 直定規・抜き型を用いた線描

IV. おわりに

本研究では線描表現を技法・描画材の別に検証したのち、幼児におけるスクラッチやスチレン版画の制作における意義や特徴、留意点等を中心に述べてきた。線描自体の魅力や種類、それらに適した描画材を確認することで、特に子どもの線描指導に扱う際の新たな表現方法や技法を生み出すきっかけとなると思われる。素朴で単純な表現の線描であるがゆえに往々にして魅力に欠ける面も否めないため、それを補う上でも持続して制作できる表現方法や工程が必要となるであろう。なお今回は、幼児の描く線そのもののタイプや描画可能な具象物については検証していない。後者の例を挙げれば、すべり台のような斜めの線での描画は年少児では困難であること⁽⁶⁾等、興味深い分野の研究は数多く存在している。今後はこれらの分野と美術の、いわゆる技法的な線描研究との相関等についても研究をしていければと思う次第である。

図版出典

図 1. 展覧会図録『20 世紀美術の探究者 アルベルト・ジャコメッティ展 矢内原伊作とともに』、東京新聞発行、2006 年

図 2. Waldemar Januszczak、『名画の技法 —ジョットからホックニーまで—』株式会社メルヘン社、1987 年

註

(1) 森田恒之・横山勝彦、『絵画表現のしくみ』美術出版社、2000 年、p.54

(2) 森田恒之、『画材の博物誌』、中央公論美術出版、1994 年、pp.120-124 参照

(3) 同上、p.107 参照

(4) ホルベイン工業技術部編、『絵具の辞典』、中央公論美術出版、2010 年、pp.156-157 参照

- (5) 東山明、『表現活動を豊かにする 絵画・製作・造形あそび指導百科』、ひかりのくに、2005年、p.54 参照
- (6) 近藤文里、『斜線構成の発達的研究』、多賀出版株式会社、1993年、参照